教出　六年下　二四年度版

きつねの窓

安房　直子

第一次指導

〈区画〉八区画（1から6は絵で分ける）

一　よむ（音読　八区画　八名）

二　とく（読後感の話し合い）

○題目　きつねの窓　（板書　話の糸口）

・　窓→形、枠の色・材料・作り方

・　狐→雄・子　ぼく→猟師　共通点

◎ひびき（この話の核心を匂わせる）

・　窓の中の絵→すでに亡くなったもの

・　不思議の始まり→ぼんやり・光、音

○手引き（各段から書き出す一語を指示）

・　ぼくが見たものを書き出す。1から6は、挿し絵を参考にして短い言葉で書く。幾つかあるが、一つだけでよい。

三　よむ（指示に沿って黙読）

四　かく（視写）

1　花畑
2　ききょう屋
3　窓
4　母ぎつね
5　少女
6　長靴
7　天井
8　白いかげ

五　よむ（板書を音読　一名）

六　とく（板書を活用した話し合い）

○事実・区分

・　自分の窓で最初に見たのは→少女→少女ことを考えていたのは何番→1→そこは何の花畑→ききょう→そこで追ったものは→白い子ぎつね→それが化けたのが→店員→店員の作る窓から見えたのが→母ぎつね→その話に共感

・　2回目に見た窓の絵の天気は→霧雨→ぬれている→長靴と青紫蘇→その庭は→家が焼けて今はない。

・　この素敵な指→魔法が消える→習慣→無意識に手を洗う→変な癖がでる

・　区分　二区分（1～6と7・8）

前を二区分（1～5と6）

前を三区分（3・4と前後）

◎山（詳しく読む箇所を決める）

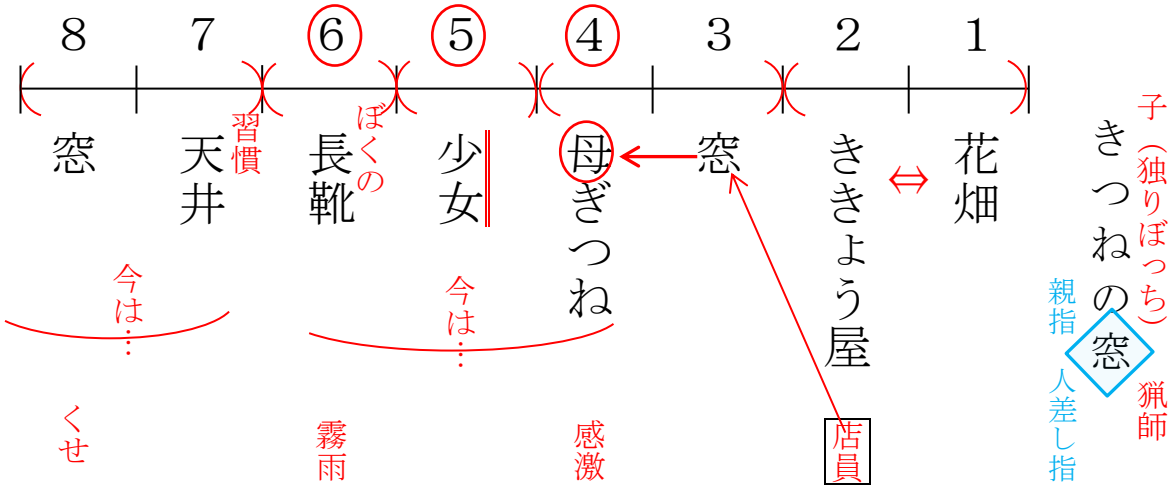
・　詳しく読みたい三か所を考える。

（子ども希望も含めて　4・5・6）

○余韻（不思議な話の世界も面白いなあ）

七　よむ（全員で板書を指音読）

〈板書事項〉



第二次指導　①②③

①　二　とく
○おさらい
・窓から見た絵三枚〈共通点〉僕と子狐
○承接
・騙された振りをするぼくと店員
○手引き
・子狐が窓を作ってからの話

「ぼくはもう、さびしくなくなりました。この窓から、いつでも、母さんの姿をみることができるんだから。」
ぼくは、すっかり感激して、何度もうなずきました。実は、ぼくも独りぼっちだからです。
「ぼくも、そんな窓がほしいなあ。」
ぼくは、子供のような声をあげました。すると、きつねは、もうれしくてたまらないというような顔をしました。

六　とく
○語義・区分
・すっかり　実は　というような
三区分（狐、ぼく、狐）
◎心
・狐のどこに感激したか。その理由は。
その感劇の気持ちが、ぼくの言葉にも。
それを喜ぶ狐の姿

②　二　とく
○おさらい
・母きつねを窓から見たぼくの発見
◎承接
・ぼくの指が染まり、窓を作ると…
○手引き
・窓を見たぼくの言葉と狐の応答

「やあ、あの子じゃないか！」
「ね、指を染めるって、いいことでしょ。」
「ああ、すてきなことだね。」
「あいにく、お金が全然ないんだ。だけど、品物なら、なんでもやるよ。帽子でも、上着でも、セーターでも、マフラーでも。」
「そんなら、鉄砲をください。」
「鉄砲？そりゃちょっと……。」
「ようし、やろう。」
「毎度、ありがとうございます。」

六　とく
○語義・区分
・やあ　あいにく　品物なら　記号
・会話者確認　三区分（感想　礼　決心）
◎心
・ぼくの喜びと狐の喜び
・いつの間にか、狐のペースに…。
（会話の雰囲気を）

③　二　とく
○おさらい
・感激のあまり出た言葉
○承接
・お土産と杉林
○手引き
・二回目の窓から見えたもの

家の中は、すこうし明るいのです。電気がついているのです。ラジオの音楽に混じって、二人の子供の笑い声が、とぎれとぎれに聞こえます。あれは、ぼくの声、もう一つは死んだ妹の声……。
フーッと、大きなため息をついて、ぼくは両手を下ろしました。なんだか、とてもせつなくなりました。子供のころの、ぼくの家は焼けたのです。あの庭は、今はもう、ないのです。

六　とく
○語義・区分
・すこうし（すこし）　せつなく　記号
・動画の部分二区分、その後を二区分
◎心
・切なくなったぼく
・その気持ちで家に帰ってからのぼく